

第4章 総括

今次調査では縄文時代の竪穴建物2棟を中心とする集落の一端を調査し、当時の生活や文化的交流を考えるうえで良好な史料が得られた。調査成果をまとめ、地域史的な位置づけと課題について触れておきたい。

(1) 当遺跡における集落の展開について

当遺跡は1974年に「天伯A遺跡」として当時の鼎町教育委員会によって調査され、縄文時代中期後葉の集落としての実態が明らかになった(第2図A)。その際は今次調査地から数十メートル松川寄りの天伯神社周辺地点が調査地となり、竪穴建物多数ほか土坑等が数多く検出された。遺構・遺物の時期は主として中期後葉の下伊那唐草文Ⅲ段階であった。一方、同時期に150mほど南側で行われた中央道地点(旧称「山岸遺跡」「天伯B遺跡」、第2図B・C)の調査では、弥生時代から古墳時代にかかる集落が発見されたことにより、縄文時代の集落は中央道北側の天伯神社周辺に中心が想定された。その後、1992年の切石体育館地点の調査や、2009年に中央道東側を通る県道羽場大瀬木線の建設に先立ち実施された調査においても古墳時代～中世の土坑、溝址などが確認され、中央道南側に古墳時代～中世の遺構が分布する状況が明らかになった。

今次調査では下伊那唐草文Ⅱ段階を中心とする縄文集落の一端を把握した。調査範囲が狭小であったため全体像は未だ不明だが、縄文中期の集落域が天伯神社の西側にも広がることが判明したとともに、下伊那唐草文Ⅱ段階からⅢ段階にかけ集落が継続したことが明らかとなった。また、中期中葉の段階については、建物等は確認されていないものの、当期に比定される遺物が認められ、少なくともこの時期に集落が存在した蓋然性は高い。一方、本調査に先駆けて行われた試掘調査では、調査地南側の遺構分布は希薄であった。現在でも小河川が流れる低湿地帯であり、居住域からは外れるようである。

以上をまとめると、当遺跡においては縄文時代中期に中央道北側で集落が展開した後、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて中央道付近に大集落が営まれた。それより東・南側は比較的湿潤な環境であり、生産域としての利用が想定される。当遺跡は縄文時代から続いた人々の営為を観察しうるという点で貴重であり、松川右岸を代表する集落遺跡としての歴史的価値をもつといえよう。

(2) 竪穴建物SI002出土縄文土器について

本報告中で、竪穴建物SI002が縄文時代中期後葉の下伊那唐草文Ⅱ段階古相、SI001が同Ⅱ段階新相と位置付けた。今次調査において特筆すべきは竪穴建物SI002出土の加曾利E式系土器である。当該系統土器は下伊那唐草文Ⅱ段階に出現し、以後当地域における主要なタイプのひとつとして展開するが、SI002で確認されたものは10数個体以上にのぼる。その内実をみると、口縁部に隆帯渦巻文等を施す一群(9・10、13～15)と、口縁部に隆帯つなぎ弧文を連続させる一群(18～21)がある。前者は吉川金利が「加曾利E式系aタイプ」(吉川 2005)としたもの。頸部無文で胴部地文に縄文を配すなど、加曾利E2式の特徴を比較的忠実に表現する。一方、後者は吉川による「加曾利E式系bタイプ」で、渦巻などの隆帯弧文を突出させながら立体的に連続させるもの(18)と、突出させないもの(19～21)がある。

また、SI002からは諏訪・甲府盆地を中心とする曾利式土器の影響を受けたと考えられる土器が比較的

多く出土した点も注目される。「斜行文タイプ」の口縁（33）、口縁部から頸部にかけて無文のもの（25）が当該型式の特徴をよく示す。また、17、23、24については、壺状の器形や頸部に波状の隆帯を連続させるモチーフなどにもその影響を見て取ることができよう。

以上のように加曾利E式系や曾利式系が多く含まれるSI002の土器は、飯田市上郷地区の平畑遺跡1号住居址（上郷町教育委員会 1988）と類似する。ただし、伊那谷南部の曾利式（系）土器については中期後葉の各段階で散発的にみられる程度であり、その影響は限定的とみられている（吉川 2019）。このような現状からみても、当建物出土土器は中期後葉の実質的な開始時期とされる下伊那唐草文Ⅱ段階の評価を進めるうえで示唆に富む資料といえる。

（3）まとめと課題

今次調査では、当遺跡のなかでも山麓に近い中央道北側の土地利用の一端が判明した。竪穴建物は2棟とも縄文時代中期後葉に位置づけられ、今次調査区は当該期の集落域内とみられる。出土した縄文土器からは、在地系の土器だけでなく、関東地方、東海地方、諏訪・甲府盆地といった各地域の影響がみられる。このように周辺地域の土器を積極的に取り込む点は「文化の回廊」とも称される当地域を端的に表す現象ともいえるが、それらの伝搬経路や相互の影響関係などについては、地域的課題として残されている。

いずれにせよ、狭い範囲の調査にも関わらず、松川流域における縄文時代の主要な集落跡として、改めて当遺跡の歴史的価値が明らかとなったことは大きな成果といえよう。

最後になりましたが、調査にあたり多大なるご理解とご協力をいただいた藤井興業株式会社様、並びに調査や整理作業の実施にあたって多大なるご理解・ご協力をいただきました皆様方に深く感謝申し上げます。